

書評・紹介

中国 1987年 1%人口抽様調査資料

中華人民共和国国家統計局人口統計司編, 820頁

中国国家統計局は、1989年4月14日、中国大陸の人口総数が11億に達したと報じ、「中国人口11億デー」大会を北京で催した。

1982年の第3次人口センサスが18年ぶりに実施されたが、5年後の87年7月1日、1%抽出の中間人口センサスが行われた。その結果は、まず88年2月に主要数字が中国統計出版社より全71頁で公表され、ついで本書が88年8月に全国分冊、全820頁として刊行され、これによって82年との5年間の比較変動分析が可能となった。今後は0のつく1990年に第4次(1953, 64, 82年につき)人口センサスが実施されていくことが決定されている。

本書の内容は、概要、都市農村人口分布、民族、年齢、教育程度、産業職業、家族、婚姻、出産、死亡、移動の計11巻からなる。省市別、年齢階級別、産業職業別等々全159表が収録されている。

筆者がこれらの結果を利用して気づいた問題点として、抽出が100分の1ということ、又中国における標本調査法の歴史があさいためか、少数民族人口と年齢別性比について若干の疑問が感じられた。

第1の特に人口数の少ない少数民族について、省市別分布までおろしてみると納得しがたい数字が一部現われる。全人口に対して少数民族の占める比率は、82年の6.70%が87年に8.0%に増加、満族についてみれば、78年265万人、82年430万人、87年917万人と急増した例もあるので一概に誤りとも判断できにくい側面がある。ちなみにチベット自治区では、82年にチベット族の全自治区に占める割合は95.15%、87年には100.0%、つまり調査対象20,847人中、漢族は4人のみで、他は全てチベット族人口となってしまっている。(82年には、回族1,772人、門巴族1,004人、珞巴族1,014人、納西族842人等がカウントされている。)

第2に性比については、87年の出生性比が110.51(82年は108.47)、安徽省では87年114.86(82年は112.5)と高くなっている。年齢別性比の分布図をみると、82年図との若干のブレがみられるようにおもえる。

以上のような点は一部ありつつも、5年間の変動が追跡でき、貴重な数値を示してくれることに相異なる。特に87年中間センサスの特色としては、初めて流動人口の調査項目が入ったことである。82年7月1日～87年6月30日までの5年間の移動経験を尋ね、その移動理由、職業、教育程度、婚姻状況等の結果が各省市別に示されている。これとは別に上海では84年以降計4回の流動人口調査が実施されながら、その調査方法と概念が必ずしも一貫していないという点があるが、いずれにせよ、その詳細な分析はこれからといってよいであろう。

その他、時をほぼ同じくして、国家統計局人口統計司・公安部三局編『中華人民共和国人口統計資料滙編1949—1985』中国財政経済出版社、1988年1月、全1,000頁が刊行され、歴年の省市別詳細データが種々フォローされている。従前の中国統計年鑑数字と一部合致しない点の問題を含んでいる。

外には『中国人口統計年鑑』、『中国人口年鑑』1985, 86, 87年版、『中国計画生育年鑑』1986・87年版、省市別に『中国人口』叢書の計29冊が順次刊行中である。雑誌としては、従前からの『人口研究』、『複印報刊資料人口学』、『西北人口』(蘭州大学人口研究所)に加え、『人口』(復旦大学人口研究所)、『中国人口科学』(中国社会科学院人口研究所)、『中国少数民族人口』などがあいついでいる。人口についての専門新聞『計画生育報』が1988年7月に『中国人口報』と名称を変え、週2回の刊行拡充を行い、多くの情報、啓蒙活動を展開している。中国人口問題は流動人口、年金改革等その深刻さはなおとどめをしらないが、ともかく1990年の第4次人口センサスが予定どおりきちんと実施されるよう期待したいものである。(若林敬子)